

幼稚園・保育所でのサツマイモに関する絵本 I

—幼稚園教育要領を通して—

細川 七重

(聖和大学大学院)

【研究目的】

ニューメディア世界になり、子どもたちは、テレビやテレビゲーム、ビデオに夢中になり、外遊びの時間が減少している¹⁾。それにともない自然体験、集団体験の減少だけでなく本離れも進んでいる。若い世代の本離れは特にひどく、読売新聞社の2002年の読書週間(10月27日から2週間)を前に実施した世論調査によると、80年調査で本を「読まなかった」のは、1割もなかったのが、02年調査では、4割を上回ったとある。特に乳幼児にとっての絵本は、情操教育や感情を豊かにする基礎となる成長発達に重要な役割を果たすものであり、欠かせない物である。

幼稚園教育要領「言葉」の「内容の取り扱い(2)」では、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりする楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」とある。子どもたちにとって絵本は、知識を得る、技術を獲得する、物語を楽しむ等、自分の体験したことを、絵本を通して再認識し喜びを得る。そして、豊かな感性が養われるのに無くてはならない存在であるといえる。

また、幼稚園・保育所で植物を栽培することは、幼稚園教育要領「環境」のなかでも「内容(5)身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。」と動植物とふれあうことの重要性をうたっている。子どもたちは、動物の世話をし、植物を栽培することによって、生命の大切さを知るのである。

このことから、本研究では、子どもたちが関わる期間が長く、育てやすく、製作や表現遊びやクッキング保育、収穫のときツルがつながって掘り出されるので遊び感覚でかかわることができる植物のなかの「サツマイモ」を中心として、子どもたちと絵本のかかわり、保育者の絵本の活用方法、意義を研究対象とする。

【方法】

幼稚園・保育所へのアンケート調査を実施した。

1. 調査対象

- ・神戸市、芦屋市、西宮市、尼崎市、宝塚市の幼稚園・保育所の全園に依頼した。
- ・アンケート質問紙は、2通りある。
 - ①幼稚園・保育所へ、「園の概要について」のアンケートを代表者1人に回答依頼した。
 - ②幼稚園・保育所で勤務している保育者へ、「サツマイモに関する絵本」のアンケートを出来る限りすべての保育者に回答依頼した。

2. 調査方法

- ・郵送法とした。

3. 調査期間

- ・2003年2月19日～2003年4月15日

4. 配布数

- ・園についてのアンケート 595園
- ・保育者へのアンケート 3801人

【結果】

1. 回収数(回収率)

- ・園についてのアンケート 199園(33.4%)
- ・保育者へのアンケート 836人(22.0%)

2. 幼稚園・保育所における幼児と保育者の絵本とのかかわり

①子どもたちと絵本のかかわり

子どもたちが自由に読むときの絵本は、「おおきなおきなおいも」がよく読まれていた。特に、サツマイモの季節やサツマイモに関する行事があったときによく読まれている。これは、保育者が、サツマイモに関する行事がある前後によく読むようになり、それに合わせて子どもたちも興味、関心がわき読んでいる。絵本の貸し出しにも、その時期に多いと回答があった。子どもたちが絵本に興味や関心、楽しみや喜びを示す

のは、保育者の保育の取り組みにも影響されることである。子どもたちが絵本を好きになる要素は、保育者や園のたゆまぬ努力にかかってくるといっても過言でない。

②子どもたちの好きなサツマイモに関する絵本

子どもたちがよくリクエストする絵本は、これも「おおきなおきなおいも」であった。この絵本は、子どもたちが自由に読むときも好んでよく読まれている。紙を何枚もつなげて、どんどん大きくなるおイモのダイナミックさに、変化していく話の内容の展開におくわくし、絵本の中に入っていくのである。視覚に訴えての大きく変化していくところ、存分にサツマイモで遊ぶことのできる楽しさ等、自分たちが経験したイモ掘りと重なり、共感し、照らし合っているのである。

③保育者の絵本の活用方法と意義

絵本がどのような場面で活用されているかは、保育の導入においてよく読まれていた。最も活用している行事は、おイモ掘りのときである。読まれているのは、ここでも、「おおきなおきなおいも」である。「こーんなおおきなおいも どうやってほりだすの?」とみんなで力を合わせておイモと綱引きをする。ここで、子どもたちは協力をしないと、大きなおイモは抜けないのである。このような描写の中に、「幼稚園教育要領『人間関係』〔内容〕(7) 友達と一緒に物事をやり遂げようとする気持ちをもつ」が養われるのである。一人では、出来ないことも、友達と一緒に力を合わせればできるのである。くじけず、目標をめざしてやろうという気持ちができ、頑張れるのである。

④保育の中での読み聞かせ

絵本は、保育の導入以外では、降園前によく読まれている。一日の活動の締めくくりとして、そして、明日への期待を持たせる架け橋として絵本が読まれている。楽しかった園での興奮を心静かに胸に秘めるように和やかに読むのである。今回の調査では、お話の時間に絵本を読んでいるとの回答が予想外に少なかった(197人、23.5%)。何かをするために読むのも大切であるが今後、保育者には、子どもたちが心落ち着いて、ゆっくりと絵本を楽しむため、お話の時間を設定し、子どもたちに絵本を読み聞かせすることだけの目的のために読むことを期待したい。

【考察】

子どもたちは、幼児期から絵本を楽しく読み、絵本に親しみ、読むことが習慣になれば、将来にわたって読書の習慣が身につくのである。このように、幼児期の基礎が大切である。この大切な導きが保育者にかかっており、保育者は、日々研究努力をしなければならない。

絵本は、すべての領域で必要不可欠である。研究目的では、「言葉」「環境」の領域だけに注目していたが、アンケート調査回答の分析を進めるほどに、「人間関係」など、すべての領域でかかわり、保育は偏ってはいけなと感じた。絵本が子どもたちの成長発達の上で良きパートナーとして、これからも幼稚園・保育所で多くの保育者・子どもたちに、読まれることを期待するのである。

調査の結果、サツマイモに関する保育をしている園(155園、77.9%)が予想以上に多かった。子どもたちに自然に触れさせたい、収穫の喜びを味わせたいと、自然への関心への取り組みが大きいことは、幼稚園・保育所での環境への配慮が感じられた。子どもたちは、植物栽培を通して、友達と共に協力し育てることによって、何かをやりとげようとする気持ちがわき、生きる力もついてくるのである。共有の喜びを持ち、植物へのいたわりを感じ、労作の喜びを得ることは、自然とのかかわりを大切にすることにつながるのである。

そして、絵本が保育者のもとでおいに読み聞かせがされていたこと。「絵本が役に立つ」と諸手を挙げて推奨していること(761人、91.0%)。今後、「楽しい絵本」(472人、56.4%)や「おもしろい絵本」(397人、47.4%)など、「心が豊かに、あたたかくなる絵本があればいいな」と回答してくれた保育者の方々に、末永く子どもたちのためにより良い保育をと希望してやまない。

参考文献(一部)

森上史郎 2002 最新保育資料集 ミネルヴァ書房

¹ 日本子どもを守る会編 2002 子ども白書2002年版 草土文化